氷疾風（フローズンゲイル）を正面から受け止め、ぼくは後ろに吹っ飛ばされた。
苔むした石畳の地面に体が叩きつけられる。
衝撃で肺に溜まっていた空気がふしゅっと抜け、頭の中が一瞬空っぽになった。
――だめだ！　同じ場所に留まっては。
反射的に体を丸めて、横に転がる。そのぼくを掠めるように、また勁風が吹き抜けた。
風の通り道が白く凍り、氷霧となる。キィン、ピキン、と澄んだ音が、あちらこちらで鳴り響いた。遠近感がおかしくなりそうな音だ。
低く、妖艶な声がそれにかぶさる。
「……よく避けたね、少年。少しは使えるようになったじゃないか」
廃墟となり果てた、古の王城。天井は高く、石造りで、音という音がよく反響する。
傷んだ赤い絨毯の敷かれた階の上には玉座が設えられ、豪奢な椅子の前には、スタイルのいいおねえさんが立っていた。
あれが竜姫。暴れん坊の魔竜たちを率いる、ぼくたち人類の敵だ。
玉座の背後には六角形の窓ガラスが嵌め込まれていたが、ツタと長年の埃で薄汚れ、巨大な蜘蛛の巣のようになっている。黒づくめのおねえさんは、どこか蜘蛛と似ていた。不用意に近づいた人間は、捕らわれ、エサとなりいのちを食らわれる。
それなのに。いや、それだからなのか。
竜姫を目の前にすると、ぼくは、いつも一瞬、その美しさに、頭が真っ白になってしまう。
大人というには瑞々しい年頃の、とっても蠱惑的なおねえさん。強大な魔力を持つそのオーラはまがまがしく、優しげな美貌と不釣り合いで。だからこそ、見入ってしまうのをやめられない。
大きな竜角のそばに誇らしげに王冠を飾り、たてがみの

ような黒い髪を威風堂々となびかせて、胸と背中が大きく開いた裾長の、セクシーな黒銀のドレスを着て。
人型をしているけれど、ぼくたちとはまったく違う生き物なのだと示しているのが、背中に生えた、棘つきの大きなつばさだった。華奢な骨格に、薄く張った皮膚の膜が、びろうどみたいに光をはじいている。
かたちだけではなく、実際に竜姫はそのつばさで空を飛ぶこともできた。加えて、集中すれば、見渡す限りの平野を氷に閉ざすことができる、法外な魔力を持っている。人間の国選魔術師など、束になったってかなわない相手だ。
飾っておきたいほど美しく、めちゃくちゃに強い。世界を滅ぼしかねない災禍の中心。
どうしてあんなに残酷な存在が生み出されてしまったのか。と、かつていっしょに竜姫討伐の旅をしていた聖職者のおにいさんが言ったことがある。創造主の思惑を疑ってしまう、と。
そのおにいさんは、ここにはいない。旅で弱った精神(こころ)を魔竜に取り込まれ、操られ、襲ってきたから……ぼくが斃した。
大事な人や仲間を失いながら、竜姫を斃すそのことだけ考えて、ぼくはずっと旅を続けてきたのだ。
「当然だよ。だって、お前の攻撃、ワンパターンなんだもん！」
ようやく辿りついた竜姫の居城。玉座の間。
今こそ決戦の時！
おねえさんの褒め言葉にぼくは挑発で返し、炎纏剣(ブレイズソード)を頭上にかざす。
氷霧のカーテンに紛れて降り注ごうとしていた金剛氷柱(ダイヤモンドアイシクル)が、高熱に炙られ、瞬時に蒸発した。
「やるねえ」
「余裕ぶっていられるのも今のうちだ。今日こそお前を、討ち取ってやる、っ！」
金色の瞳を楽しげに細めた竜姫に向けて、ぼくは炎纏剣(ブレイズソード)を構えたまま、勢いをつけて駆け出した。ぼくの靴には海

妖の魔力が閉じ込められていて、身につけた人間の全身をうたかたのように軽くしてくれる。よく見極めれば空中に浮かぶ氷の粒だって踏めるし、闇や風に乗ることもできる。

ぼくは氷疾風（フローズンゲイル）を放つ竜姫を翻弄するように方向を変えて跳び回り、炎弾（フレイム）を放った。

弾はいくらか竜姫を掠ったけれど、固い皮膚を持つ巨竜の眷属だけあり、ダメージを受けた様子はほとんど見られない。

けれどぼくの本命も、炎弾（フレイム）を当てることじゃなかった。しゃにむに炎弾（フレイム）を放つことで、竜姫は防御に気を取られ、攻撃に気が回りにくくなる。

その隙をついて、懐に跳び込んでいくのだ。多少の怪我は承知の上。肉を切らせて骨を断つ。それしか、圧倒的な魔力差を埋める方法はない。

空中でステップを踏んで、尖った金剛氷柱（ダイヤモンドアイシクル）の隙間をかいくぐり、いざ竜姫に飛びかからんと刃を構え直した時。

——しまっ……

ぼくはある種の予感と怖気に震えた後、視線の先の地面を見た。

そこには深遠がニタリ、と仄暗い口を開けて横たわっていた。

「あぁぁぁぁぁ……！」

叫び声をほとばしらせながら、ぼくは落ちていく。竜姫のドレスの裾、そこからぶわりと膨張する邪悪な影の中、一度呑み込まれたらもう戻ることのできぬ漆黒の魔の世界へと。

落下する。やがて声も、枯れていく。

深い闇を押し割って、どこまでも、どこまでも。

高速で落ちていく間、何度も、いつか地面にぶつかる瞬間の衝撃と激痛を想像して、ちびりそうになる。

時間の感覚が引き延ばされた悪夢のよう、いつまでも、どこまでも。おしまいの時はなかなか訪れない。もうだめだってことだけ、わかっているのに。

――もう、イヤだ。
ぼくの目から涙がほとばしる。
――もうだめだよ。無理だよ。あんな化け物みたいに強いやつ、ぼくのレベルで斃せっこない。何度。ねえ、何度、勇気はぼくの心を逃げ出して、ぼくを無力な、十足らずの坊やだと知らしめるの。
……もう、やめたい。家に帰りたいよ……母さん。
どれだけの時間が経ったのか。いつの間にか、ぼくは凝った闇の中で、まだ痛む体を丸め、ぼうっとしていた。
母さんのお腹の中にいる赤ん坊が、こんなふうな恰好をしているのだって、どこかのパブで聞いたっけ。
そんな色々を教えてくれた博識なあの子も、もういない。
誰も、いない、みんな――ぼくを置いて、行ってしまった。
耳が痛くなるような静寂の中。いつもの声が、ふわりとぼくに降りかかる。
「CONTINUE?-」

→→→つづきは
《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！